

第17号

定価1年間300円
組合員の購読料は
組合費に含む



発行 檜山教職員組合

〒043-0056 江差町字陣屋町 86-1
Tel. 0139(52)0858 FAX (52)1490
発行責任者 石橋英敏
E-mail: hiyamakyoso@proof.ocn.ne.jp

一七本の討論で確かめ合った

2015 年次大会

檜山教職員組合は二月二日、江差町で二〇一五年度年次大会を開催しました。

冒頭、石橋委員長があいさつ、「すでに戦時体制」と語る学者の著書を引用し、現政権の強引なやり口を指摘し、戦争への道を阻止するには、国民的運動がこれからいっそう大切になってくることを訴えました。

また、北海道高等学校教職員組合、年金者組合檜山支部、道退教檜山支部など友誼団体各位から寄せられたメッセージも紹介されました。

“ユーモア”がある。“本質”が見える。
「討論おもしろかったあ！」



来賓で挨拶をした
道教組委員長西野氏

大会には、道教組から西野委員長が来賓であいさつに立ち、「第一次安倍政権で、教育基本法が改悪され、『教育条件』に手をつけた。それが今の現場の管理統制につながっている。第二次安倍政権では、『教育内容』に手をつけた。全国学テというたった一本の『ものさし』で測ることを貫徹しようとしている。現場は、『上からきたもの



思わず笑う代議員

は仕方がない」という雰囲気になっている。本当にそうなのか、真正面から向かい合うことは難しくても、授業内容を再構築し、子どもたちの事実に基づいた学び、自己肯定感を育み、子どもたちの幸せを考えた学びづくりが重要ではないか」と投げかけました。

また、道退教檜山支部からは、金子事務局長があいさつ。「今、子どもたちのためにすべきことをまっすぐに見つめてほしい」と述べられました。その後、今年度のとりくみの経過を受けて各代議員が討論を行いました。討論は全体として、今の教育施策における子どもと現場の実情をリアルに挟り、課題や願いを浮き彫りにするものとなりました。

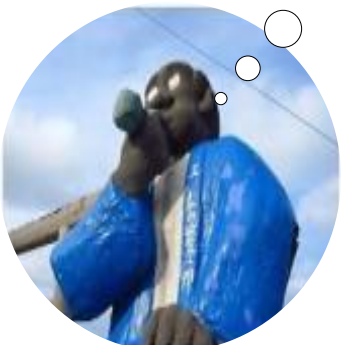
【以下討論を要約で紹介します】 主任手当て活用について

「主任」という位置づけは、学校教育法にはない。当時、「主任」の身分付けは、組合はもとより、全国の校長会や教頭会、PTAも反対し、身分としての存在では入り込ませられなかった。それはなぜか。ピラミッド型の体制は、教育には馴染まないという見

識があったから。今は、学校運営管理規則の中に主任を入れ、連絡調整の仕事として入れ込んできた。学校は校長一人に教諭多数といういわゆる鍋ぶた構造で、本来機能していた。ところが、そこにピラミッド型構造を持ち込み、教員に給与格差をつけることは、つまるところ子どもへの格付けにもなると反対してきた。ただ、反対だけが強調され、学校体制が壊れてきた。そこで、学校の運営組織を壊さないように行政・管理職・組合が知恵を絞って「合意書」を作成し、学校を守ってきた。それが三・二六合意確認書（二〇〇三年失効）だった。

檜山では、手当については、返還ではなく活用してきた。例えば、劇団をよんで観劇したり、子どもたちの帽子やなわとびを買ったりしてきた。時代の変遷と共に、単組、道教組での活用が変わってきた。その一つが奨学金制度だった。この制度は、奨学金が回収できなかったため、立ちゆかなくなつた。残念ながら制度としては破綻してしまい、見通しの甘さに反省することは多々ある。ただ、それでも、当時困っていた家庭の子どもたちのためになっていたのではないかと捉えている。主任手当抛出金活用

厳しい時代の中でも、“とんち”を忘れなかった
江差の繁次郎。モニュメントに書かれた言葉は、
“笑え、わらえ、へば ええごこある”



自分自身が「テスト収斂システム」の中で育ってきたことに気づいた。テストに学校や教師、子どもや保護者が支配され、数値が評価の根拠となり、それにすべてが左右される。自分たちにとつては、それが当然であり、普通のシステム。しかし、よくよく考えると問題視するべき大事なポイントがたくさん潜んでいる。①目標がテストの点を取るようになってしまっている。②その目標を達成するためだけを見定めて、親も教師を含む大人も、そこに何の問題も感じずに押し進めてしまっている。③点を取ることが目的であるために、どのように点数がつけられるかを考えるこ

子どもたちに幸せになる力を！
（執行部）

については、今までも組合とは一線を画し、一般の方々に入ってもらい、別組織を立ち上げ、そこで検討してきた。しかし、その組織も高齢化が進み、新たなスタートを切る必要に迫られた。世代交代をした主任手当活用委員会を開催し、早期に検討を始めたい。子どもに直接的に役に立つような活用にしていきたい。

となく、数値が独り歩きしてしまっているなど。

テストが悪なのではない。テストの良いところは上手に利用しながら、それだけになることの危険を理解しつつ、子どもたちが一時間一時間の授業の中でキラキラして授業をつくっていききたい。もっと大きく言えば、本当の学力・生きる力を蓄え、社会に出たときに自ら幸せをつかんでいけるような手助けをしたい。これからも、たくさん学び、私の教師としての「根っこ」を太くしていきたい。(青年部)



山根さん
も連れて安心して
おしゃべりできる
場がほしいな...
そんな折、組合事
務所を訪ねると、

「あっ、この三階なら子どもたちの目も届くし、気兼ねなく使えるし、ちょうどいい。ここで、育休中の先生方の交流できれば」と思った。それが「Hug Cafe」の始まり。名前の由来は「育」と「Hug」をかけた。孤独になりがちな育休中の先生方や復帰を目の前にして不安な先生の思い・悩み・笑顔を共有しようというもの。このようなことは全国的にもあって、各地の教職員組合も取り組んでいた。昨年二月から今まで、計一〇回活動してきた。「長谷川書記のお料理教室」「子育てに関わる権利の学習会」「我が子がはまった絵本の交流会」「復帰ママたちが語る、復帰後の生活交流会」な

全国青年教職員学習交流集会 in 静岡「TANE!」に参加して

せたな町立大成中学校 富樫 耀



いつか自分の人生を振り返った時、必ずこの瞬間があると思うのです。「TANE!にあの時、行って本当に良かった」。今回の研修は自分にとって、溢れんばかりの衝撃と感動を与えてくれました。正直、表現につまるところが多いです。その中で、かろうじて言葉にできた2つを述べさせていただきます。

1つ目は、「全国各地の先生方が確かにいる」という実感を、身をもって体験できたということです。これは、何か特別なことがあったという訳ではなく、自分にとって未知の地であった静岡で、見知らぬ全国の先生たちと過ごす、という環境下での2日間の後、自然と湧きあがった想いです。都道府県、それぞれに沢山の学校があり、教師がいる、この事を心の底から感じ、納得することができました。知識と体験が合致し、自分の中で世界の一部をはっきりと認識できたと思えました。裏を返せば、いかに自分は狭い視野で生き、物事を捉えていたのかも感じます。現在、せたな町立大成中学校に勤務していますが、今までは「大成」という枠しか意識できておらず、その枠内で生きる、という感覚でした。ですが、研修後は「日本、北海道、檜山管内、せたな町、大成」と、意識する枠組みが外側へ広がったと実感しています。

2つ目は、「自分が1人の教師として、人間として“よい生き方”とは何か」と顧みることができたということです。「教師」をライフワークとした自分は、教育する公務員としての自覚とそれに合うであろう生き方が必要される一方で、自由に生きる人としてどう生きたいのか、又、教師という身分の生き方とどうすり合わせていくべきなのか、考えました。きっかけは研修の間、学校、地域から離れ、非日常にいる自分の存在が小さく、不明瞭に感じたからだと思



います。色々な先生方と、教師としての在り方を語る機会がありました。理想や教師の本音が様々と飛び交い、大きな学びとなりました。ですが、逆にそれは自分が教師であるから語れるのであって、自分の生き方が「教師」という1つのルールから離れていないのではないかと疑問に感じました。つまり、自分から教師という部分を切り離れた時の自分が何者で、何を求めているのかということです。教師というルールから離れ、自分と向き合い、外側を見て、改めて教師をいうもの考えられるようになりたいです。

「何が言いたいのか全く...」、この未熟な自分ではと、作りながら感じています。ですが、今回の学びを、多くの方に伝えたい、伝えるべきと思っております。

ど。ママ達が集まると話が尽きない。子育ての悩み・不安、産後の美容トクなどいろいろ。SNSで気軽に交流できるツールもあるけど、やっぱり顔を合わせて話し、つながり合うことは大事だと思う。実はサブタイトルを檜山のママとパパをつなぐ場としていっているが、パパは登場する機会がなく、また、活動も南部に偏っているのでも、それも解消したい願いがあ



さし」を持つていっている人は、費用対効果がわかり、有意義な使い方ができ、成功する人になれるという考え方があ

いないか。ムダ・遊び・いたずらをしていない子どもを育てようとしていないか。休みぐらいいちよつとダラダラして、ちよつとサボるのは悪なのか...、ムダは悪なのか...、子どもってムダなことをする時期ではないのか...追いつていける環境で育つとどんな人間に成長するのか、今の学校は、もしかしたら「短いものさし」を持たされる人間製造工場なのかとさえ思ってしまう。じっくり育たなければ本来に生きた力、「長いものさし」は育たないと考える。そのために、子どもらしいムダやダラダラが必要であることを粘り強く訴えたい。そして、職場に一人でも理解を広げ、仲間を増やしたい。

檜山教職員の集い
5月9日(土)
教科書の中からたくさんの「問い」を生みだし、子どもたちが「おもしろえ」と能動的に学び出す授業をつくってきた笹本裕一先生(釧路市興津小)。授業作りのヒントがいっぱい! 中学校の先生もヒントをもらえます!